

令和7年1月20日
特別支援教育課 企画係
担当：狩野 （外線：027-226-4651）
（内線：4652）

群馬県インクルーシブ教育推進有識者会議（第2回会議）結果 について

1 期日

令和6年12月23日（月）午後6時～

2 場所

県庁24階教育委員会会議室（対面・オンライン併用）

3 出席者

(1) 委員（11名中10名出席）

霜田浩信委員、滝坂信一委員、是永かな子委員、伊藤俊委員、飯島邦敏委員、藤澤都茂子委員、
代田秋子委員、高木沙祐里委員、清田和泉委員、池田克弘委員

(2) モデル校

増田眞次校長

(3) 事務局（16名出席）

4 内容

(1) 海外視察報告

日 程：令和6年9月15日～9月22日

視察先：デンマーク義務教育学校2校、スウェーデン義務教育学校3校、
不登校対応校2校、大学1校、行政1市

内 容：特別支援教育の体制、教室環境、子供、教師の姿等



(2) 理解啓発イベント報告

日 程：令和6年12月6日（金）～12月10日（火）

内 容：児童生徒作品展、ステージ発表、学校間連携、シンポジウム等

来場数：約4,500名



(3) モデル校実践研究報告

内 容：カリキュラムマネージャーの役割、交流及び共同学習の様子

対 象：上陽小学校知的特別支援学級6人

伊勢崎特別支援学校3年生6名

授業数：10月より全6回

動画による交流1回、リモート2回、対面3回



(4) 協議

5 協議における主な意見（要旨）

（A委員）

- ・特別支援学校と特別支援学級との統合交流というところで、すべての学びが連続体として位置付いていることが大事。
- ・通常学級、支援学級、支援学校なのかではなく、それらがなだらかにつながり、通級的な場所に入ってもよいし、一時的に利用してもよいというところで北欧の実践が参考になるとよい。

（B委員）

- ・イベントは、障害者とか、それに関係した側からだけの発信だと受け手になってしまう。興味をもっていない方々に届くよう、多くの人が集まる商業施設で行う必要がある。
- ・高校と特別支援学校のコラボ企画は、同じ子供同士のアイディアや想像力を活かして、企画運営から生徒同士に考えてもらおうとよい。

（C委員）

- ・イベントは、企業とうまく連携することができれば、企業をとおしての理解啓発、一般市民への接点をつくっていくことができるのではないかな。
- ・インクルーシブ教育を子供に主体を当てながら進めていくためには、そこを上手に構成していく先生方の意識やスキルを向上させていく必要がある。そうすると、様々な教育の大事さが包含された形で進められるのではないかな。

（D委員）

- ・インクルーシブを目指したイベントを企画するのもよいが、普通にあるイベントの中に、特別支援学校などが入り込んでいく方が、ある意味インクルーシブなのかなと思う。
- ・インクルーシブというタイトルを出してしまうと、先日のシンポジウムでも話題にあがったように、それに興味をもった人しか来なくなってしまう。そうではないイベントに参加することが大切かな。

（E委員）

- ・交流及び共同学習をする際は、それぞれの学校の教育課程の違いを分かった上で、共通する学習をつくっていくことが大事。

（F委員）

- ・インクルーシブは、個別最適な学びという文脈に位置付けることもできると思う。一方で何かに位置付け続けると、位置付かないものが気になってしまうと思う。あまり当てはめすぎず規範意識的なものを緩めていく方が、いろいろなことが楽になるのではないかなと思う。それはカリキュラムオーバーロードの問題や、いろいろなところに通底する。

（G委員）

- ・学校は未来の小さな社会。互いに軋轢が生まれて初めてそこに新しい価値観が生まれる。意図的に多様性を感じられる空間を学校は演出するべきである。
- ・モデル校において、子供たちはダイナミックに変わり始めている。先生方は、子供たちが変化していることで手応えを感じている。そういった意味ではシステムが機能しているか。教師も子供も新しいことに挑戦しているというマインドでは、コンセンサスは取れていると感じる。

(H 委員)

- ・授業とは業を授けること。この言葉に先生と子供の関係が凝縮されている。我々は今それを超えようとしている。実際に現場の先生たちがそのことを相対化しながら越えようとするのが大切。
- ・学習指導要領には、中学校までの9年間でどのように育てるかという視点が示されている。そのため、教科研究が欠かせない。その教科の構造が分かっていることによって、子供の自由進度学習にしても、どこまでできるかということが見えてくる。それが個々の評価にもつながる。

(I 委員)

- ・相手を知るといった際、縦だけの物差しで相手を知るのではなく、体験の中から違いを自然に感じられる知り方をしてほしい。

(J 委員)

- ・障害のあるなしに関わらず、相手がどんなことに興味があるのかを子供たちは一番知りたい。興味があれば自分もやりたい、もっと引っ張っていきたいなど、自然と出てくるのではないかな。

(K 委員)

- ・理解啓発イベントでは、インクルーシブフェスタという形になり今までよりもすごく広がった。高校生が参加したことは今までにはなかったこと。今後、商業施設で行えればさらに広がっていくのではないかな。
- ・特別支援学校では、それぞれの学校で小・中学校や高校との交流及び共同学習を行っている。すでに行っているもの、積み上げてきているものに少し目を広げていくと、いろいろヒントが得られるかもしれない。